

# 乗雲

寺報

第102号

H30.8.1 発行

編集人

〒959-2646 新潟県  
胎内市西栄町 2-8  
TEL0254-43-2419  
FAX0254-43-4560  
広厳寺  
住職 神田英俊

メール

otera@kogonji.jp

母の死に会う



道元さま八歳の冬、承元元年西暦1207年、母没す。お母さまは、いよいよ臨終が近づくと道元さまの手をお取りになり、出家して父母の冥福を祈り、人々の苦を救う道を歩むよう」と申され亡くなられた。道元さまは息を引きとられたばかりのお母さまのかたわらに正座されると、心をこめて香をお焚きになり、その立ち上がる香煙をみて人の命のはかなさを、しみじみ感じられた。

道元禪師御一代記押絵②

古人云く、霧の中を行けば覚えざるに衣しめると。よき人に近づけば覚えざるによき人となるなり  
り 正法眼蔵随聞記)

「昔の人が言う、霧の中を歩いていると何時とも知らないうちに自然に衣が湿ってくる。それと同じように、よき人のそばにいて知らないうちによき人になっている」同じ喩えに、「薫習」がある。いつもお香を焚いているといつのまにか部屋全体によい香りが染みついてくる。

このたび、三番目の弟子が関川村雲泉寺様の後継として入ることになりました。長男は当寺副住職として、次男は村上市千眼寺の住職を務めています。これで三人とも僧侶としての道を歩むことになりました。三人とも苦小牧の駒沢大学付属高校仏教専修科に学び、その後大学の仏教学部の課程を修了し、永平寺で修行し、

(三男は四国瑞応寺僧堂を経て永平寺へ)それぞれ教師資格を得ています。修行当初は衣の着方、袈裟の着け方、応量器(食器)の扱い、立ち居振る舞い、お経の読み方等々ごちないものです。次第に「薫習」して一人前になります。

先代洞光方丈は在家の出身で小僧として福井県丸岡の長昌寺という寺に預けられ、住職であった先々代徳仙方丈に隨身、永平寺では戦前戦後と長く修行を続け苦勞されて当寺の住職となりました。私も師匠であり父である先代住職の僧侶としての真摯な後姿を見ながら、同じ道を選びここまでやって来ました。

よき人に近づけば覚えざるによき人になるなり」

道元禪師の言われるよき人とはどういう人であるか、それは道を求めていつも努力している人のことでもあります。私たちの毎日の家庭生活の有り様、態度はとても大切であり、それが親子、孫へと薫習されていきます。模範となる生き方が必要です。

## 平成三十年度年回表

〔回忌〕

〔没年〕

一周忌	平成二十九年
三回忌	平成二十八年
七回忌	平成二十四年
十三回忌	平成十八年
十七回忌	平成十四年
二十三回忌	平成八年
二十七回忌	平成四年
三十三回忌	昭和六十一年
五十回忌	昭和四十四年
百回忌	大正八年

▼平成三十年度の年回忌表です。正当各家には昨年十一月に通知していただきますのでご確認ください。▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせいたします。

▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌、丸十二年目が十三回忌となる。